

## カザフ伝統音楽の個人学習に関する考察

東田 範子(東京藝術大学大学院)

本発表は、カザフスタンで、教育機関に属さず個人的に伝統音楽を学習する慣習について検討する。

カザフ音楽の担い手にとって、音楽教育機関で教育を受けたか否かは、音楽家としてのアイデンティティに大きな影響を持っている。それは、旧ソ連の音楽教育の考え方を踏襲した、「教育のある *oqyǵan* / 教育のない *oqymaǵan*」という形容詞に表されている。「教育のある」音楽家たちは、音楽小学校・音楽院など国立の専門教育機関を卒業している。一方、「教育のない」音楽家たちの学習手段は、公私の教育機関における非専門的な習い事としての集団授業と、機関を介さない個人的な音楽学習に二分できる。

発表者は、カザフスタンにおける伝統音楽の専門化とアマチュアリズムのダイナミクス、およびその背景としての教育／学習に関心を持っており、本発表では、その一部として、個人で行われる音楽学習に焦点を当てる。この課題に関して、発表者は本年の7～8月に現地で聞き取りおよび観察調査を行った。調査から明らかになったのは、少なくとも60年代以降、個人的に伝統音楽を学ぶには次の方法があるということだ。

1. 音源を用いた独学:メディアを通じて聞いた音楽を自分なりに再現する。
2. 身近な人の影響:家族や親族に手ほどきを受ける。彼らの演奏を見聞きし、自分なりに再現する。
3. 師弟間の稽古:a)主に年少の演奏者が、宴会や演奏会で知り合った年長の演奏者に師事を依頼し、稽古 *dáris* をつけてもらう。b)同様に、年長者自らが年少者を稽古に誘う。これらのケースでは、両者が互いを師匠 *ustaz*・弟子 *shákirt* と呼び合うようになる。

発表では、上記それぞれについて詳細に説明する。1, 2だけでなく3の場合も、稽古は経済的な取引の対象としては考えられていない。そのため、指導者が稽古そのものによって生計を立てるという概念もなく、稽古を存続させるための約束事もみられない。

そのうえでなお成立するカザフ音楽の個人学習は、現代社会における教育システムとしては脆弱なものだが、だからこそ、学習者と指導者双方の強い能動性と精神性が出会う稀有な場を作りあげている。